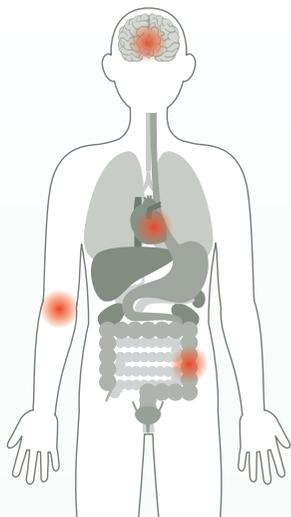


レビー小体病とMIBGによる心臓の交感神経の検査

レビー小体病について

レビー小体病は、からだにレビー小体とよばれる異常なたんぱく質がたまり、神経が障害されることで引き起こされる病気です。このレビー小体は、脳や心臓、消化管や皮膚などの全身にできるため、レビー小体病はからだ全体の病気であるといえます。



レビー小体が存在する
主な場所

主なレビー小体病

- ➔ パーキンソン病
- ➔ レビー小体型認知症
- ➔ 認知症を伴うパーキンソン病

レビー小体病はからだ全体の神経が障害される病気です。神経が障害されると、以下のような症状があらわれることがあります。

- 手足がうごきにくくなる
- 認知症
- 寝言
- 立ちくらみ
- 頻尿
- 便秘

心臓には交感神経とよばれる自律神経がたくさんあり、レビー小体病では早くからこれらの神経が障害されます。この障害は全身の症状があらわれるよりも前から始まっていることもあるため、心臓の交感神経をみる検査が重要です。

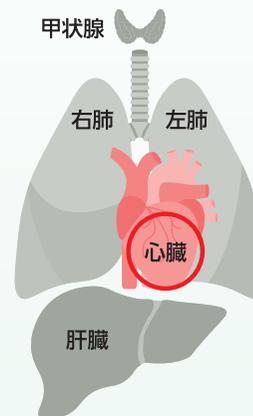
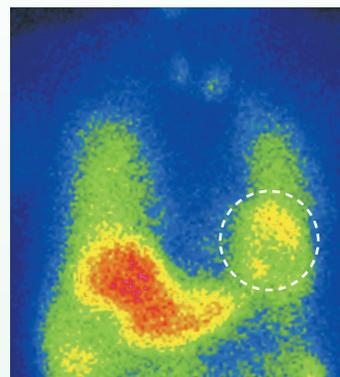
※心臓の交感神経は障害されても、心臓のはたらき自体は基本的に変わらないと考えられています。

MIBGによる心臓の交感神経の検査

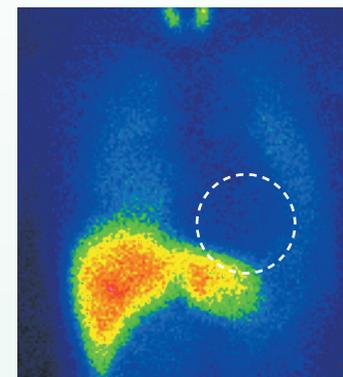
MIBG検査は、ごく少量の放射線を出す目印がつけられたおくすり(MIBG)を用いて、心臓の交感神経の状態を画像にして調べることができる、体に負担が少ない検査です。レビー小体病では心臓の交感神経が障害を受け、MIBGが心臓に集まりにくくなるため、他の病気との判別をする際の参考になります。

MIBG検査の画像(イメージ)

正常な場合



レビー小体病の場合 (画像はパーキンソン病)



心臓の交感神経が障害されているとMIBGが集まりにくくなるため、心臓のある場所が暗く抜け落ちたように見えます(右図)。

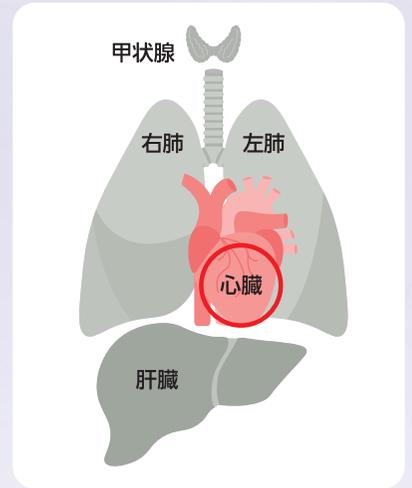
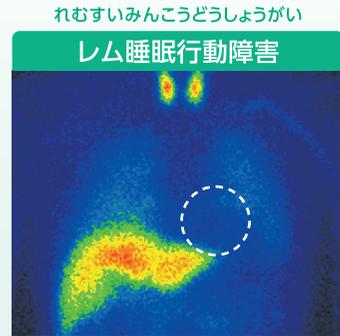
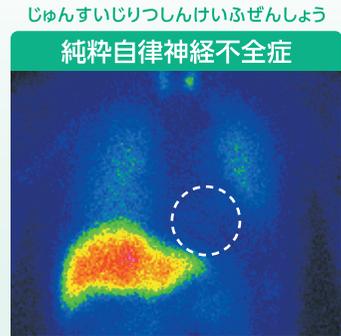
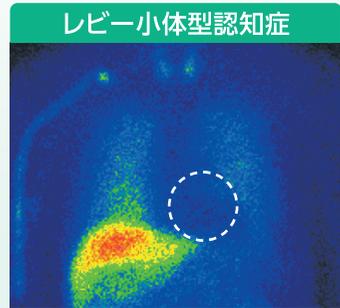
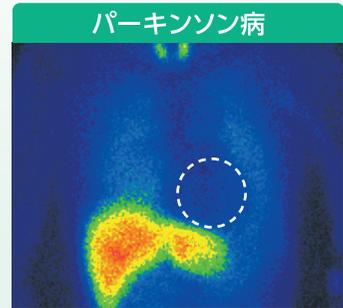
注意事項

- 検査結果に影響をおよぼすおくすりがあります。服用しているおくすりがある場合は、事前に申し出てください。
- 妊娠中・授乳中の方は申し出てください。
- この検査1回あたりの被ばく線量は、およそ1.4ミリシーベルトです。健康被害の心配はないと考えられています。

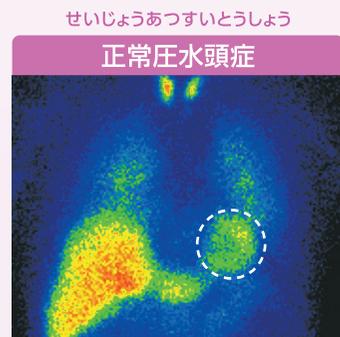
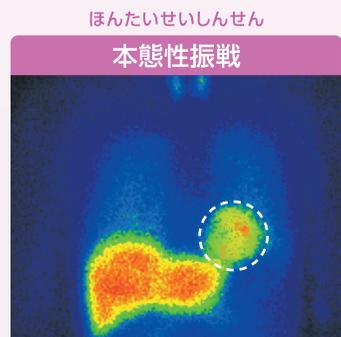
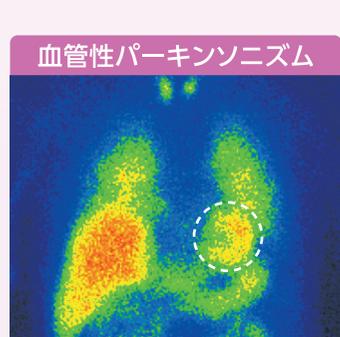
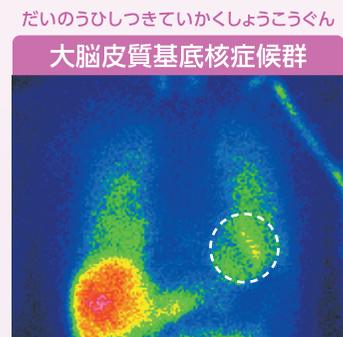
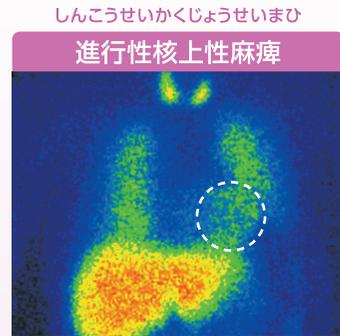
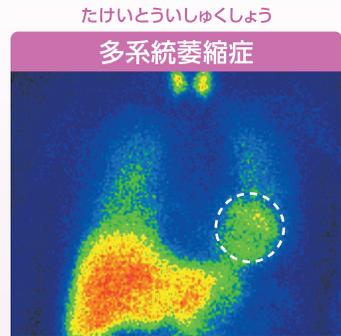
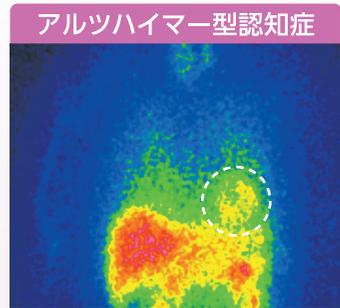
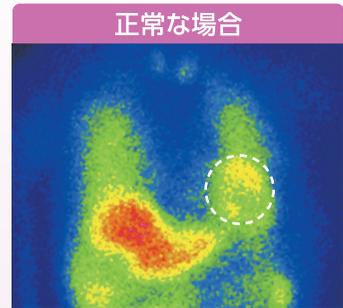
紹介した症例は臨床症例の一部を紹介したもので、すべての症例が同様な結果を示すわけではありません。

レビー小体病との鑑別が必要な病気の画像所見

心臓にMIBGが集まらないもの



心臓にMIBGが集まるもの



MIBG検査は今の症状に対する適切な治療を行うための大切な検査です。



筑波大学
医学医療系神経内科学分野
監修 齊木 臣二 先生

資料
活用方法



心臓へのMIBGの集まり具合 少ない  多い